

壇の浦を過ぐ。

村上仙山

魚莊蟹舎雨煙と為る

蓑笠独り過ぐ壇浦の辺

千載の帝魂呼べども返らぬ

春風腸は断つ御裳川

【作者】 村上佛山（一八一〇～一八七〇年）（文化七年～明治十二年）幕末～明治初期の漢詩人。豊前・京都（みやこ）郡の人。

名は剛。字は大有。通称は喜左衛門。亀井昭陽、貫名海屋に師事し、郷里で塾を開く。七十歳没

【語釈】 *壇の浦…山口県下関市の東端 *魚莊…漁夫の家 *蟹舎…魚莊と同じ *蓑笠…みのと笠 *御裳川…壇の浦に注ぐ小川の名

ここではそれをつけた人のこと *帝魂…安徳天皇の御霊（みたま） *御裳川…壇の浦に注ぐ小川の名

【通釈】 見渡せば、獵師の小屋が点々と、折からの春雨にかすんでいる。みのと笠をつけた私は、ひとり壇の浦の辺を通った。幼い安徳天皇が御入水されてから千年、いくらお呼びしても御霊はお帰りにならない。御裳川を吹く春風に哀れを感じて、腸を断つ思いであった。

【参考】 《安徳天皇》 高倉天皇の讓位を受けて即位したが、木曾義仲が入京したため平宗盛とともに都落ちする。壇ノ浦の戦いで祖母の平時子（二位尼）に抱かれて入水した。わずか8歳であった。二位尼は「水の底にも都はありましよう」と、慰めたという。父は高倉天皇で、母は平清盛の娘の徳子（後の建礼門院）、祖父は、平清盛。母の建礼門院も入水するが、熊手に髪をかけられ引き上げられている。